# 新発田の白壁兵舎と雪中行軍

元新発田駐屯地援護室勤務　佐藤　和敏

新潟県新発田の地は、慶長３年（１５９８年）より溝口家が約２７０年間１２代にわたり別名菖蒲(あやめ)城と呼ばれた新発田城を築城し治めた地である。しかしこの新発田城には明治４年の廃藩置県に伴い陸軍東京鎮台歩兵第８番大隊が駐屯し、明治７年には域内に白い漆喰の外壁からなる白壁兵舎が造築された。この白壁の兵舎はフランス風建築様式に日本の城郭様式を併せもった建築物であり、しかも明治政府による城郭破却令により取り壊された新発田城用材を再利用したものであった。

新発田城内におかれた軍は明治１７年に歩兵第１６聯隊となり、日清・日露の両戦争、シベリア出兵、満州事変、日中戦争、ノモンハン事件、太平洋戦争等に、この地から出兵し敗戦を迎えたが、この間、白壁兵舎は部隊により長く使用されてきた。戦後となり保安隊第２普通科連隊第３大隊が昭和２８年に金沢からこの地に移駐し新発田駐屯地が創設され、昭和３７年には現在の第３０普通科連隊が設置された。木造２階建て約１６００平方メートルのこの白壁兵舎は、この間もそのまま使用され、倉庫や新隊員教育隊教場として或いはその歴史的遺構により広報史料館として活用されてきた。しかし老朽化は著しく平成１６年の中越地震では一部天井が抜け落ちた。

この間、旧防衛庁でも自衛隊の駐屯地にある歴史的建造物を保存してもらいたいという全国的な動きに基づき、平成１２年に当時の次期中期防衛力整備計画の中で、この白壁兵舎も国内に残る最も古い明治期の歴史的兵舎として工事を施し、保存することとした。一方、新発田市も市の歴史の変遷が刻み込まれたこの白壁兵舎を隣接する新発田城（平成１８年に日本城郭協会から「日本１００名城」に認定）と一体的に広く市民や観光客に開放できるようにとの考えから保存を求めていた。このようなことから平成２１年８月から白壁兵舎を残し新発田城跡公園に隣接するよう駐屯地の南側に移設する工事が行われ、部内者による落成式が３月１５日に行われた。

― 閑話休題 ―

この漆喰塗の白壁兵舎は映画「八甲田山」のロケにも使用されたが、この地に駐屯していた歩兵第１６聯隊も日清戦争後の明治３１年２月に大規模な雪中行軍を行い、１７項目に及ぶ詳細な研究成果を得て、明治３１年３月１日に新潟新聞にシリーズでその成果を発表した。その一端を紹介する。

「混成中隊は新発田第１６聯隊の各中隊より屈強なる兵士を選抜し、之を引率したる中隊長髙石大尉以下将校（５名）は勇敢の人なるは無論、２７、２８年の戦役（日清戦争を指す）に従軍し偉勲をたてたる名誉の軍人なり」とある。

当時の戦時１個中隊（総員２２６名）で、２月の厳冬季に８日間の行程で行軍し、新発田から赤谷～津川～喜多方～檜原峠～アララギ峠～米沢～小国街道を経て新発田に帰還した。なんとこの研究発表は同年４月に遠く北海道の「北海道毎日新聞」に、全道聯隊の参考に資するに足るとの評価を得て転載された。

記事冒頭には「越後新発田なる歩兵第１６聯隊は、去る２月１２日より同２０日迄、雪中行軍を挙行」とある。内容を今風に解釈すると「カンジキ」での各種地形の進路開通要領及び隊形の維持、背嚢(はいのう)重量の適否、疲労の状況及び靴ずれ患者の状況、休憩を行う適切な時期方法時間、兵器、被服、装具の損傷予防法、そりでの行季（軍事物資）運搬法、歩哨交代時間の適度、目測の誤差及びラッパ音の達する距離等様々な成果が記されているが、特に興味を引くのが、雪中行軍中の糧食について記された項目である。「寒中積雪での行軍では、空腹を訴える者が多く、昼食のほか、間食として餅を携行することが望ましく、このたび５カ所の大小峠を通過するにあたり間食餅を各自３個携えた」と記されている。「餅は握り飯より携帯が便利で、凍りにくく腹もちが良いとの理由である。さらに塩で食べると最高である」とも記されていた。

この記事の４年後、八甲田山において、２１１名が凍死した青森歩兵第５聯隊の遭難事故が起きた。青森の聯隊がこの記事を目にしていたなら、あるいは事故を防ぐことができたかも知れないと思われる。